

1、実習前の目標

- ・生徒にとって「分かる授業」がしたい
- ・勉強が面白いと思えるような「楽しい授業」がしたい
- ・授業を通して生徒に受け入れられたい

2、実際に教壇に立ってみて

自分が今まで培ってきたものが何一つ通用しない。全てが本当に「分からなかった」。

→裏を返せば視野が格段に広がったということ。

日々、巨細問わずあらゆるものを観察し、吸収していく。

3、目標の到達と霧り

もうすぐ実習1週目が終わるといった頃には、多くの生徒から話しかけられるようになっていた。そして生徒達から「先生の授業分かりやすく面白いです！」という声を貰う。

→しかし、このあたりから私の授業は悪い方向へ傾倒していく。

試行錯誤しても上手くいかない、生徒がやけに盛り上がる。 →『違和感を覚える授業』

4、生徒不在の「漫談」

生徒に「分かりやすい」「面白い」と言って貰えたことで、自分の授業に対して自信が湧いたが、同時にその自信の中に「驕り」の感情を生み出してしまっていた（実習生なのに「できる先生」だという驕り）。また、その自信を少しでも保つことができるように躍起になっていたのかもしれない。

自分を高めるための、自分の地位を保つための、生徒不在の授業。生徒に楽しんでいただくための「漫談」を展開しているに過ぎなかった（極端な言い方になるが）。

5、研究授業の教訓と「生徒を思う」ということ

実習最終日、「漫談」状態のまま研究授業を迎えた私の授業は大失敗に終わる……

授業後、先生方より「あなたが授業で何をしたいのかが分からない」「あなたはこの授業で生徒に何を伝えたいのかが分からない」とのご指摘をいただく。

→根本的に「生徒を思う」ということが曖昧であったと気付かされる。

生徒に対する根本の思いや考え、つまり明確な「生徒にこうなって欲しい」という思いや考えが曖昧。そのため、単元の目標・本時の目標が曖昧になり、授業が上手くいかなくなる。

6、生徒は教師を映し出す鏡

教師が真剣に授業すれば生徒も真剣に反応を返してくれる。逆に教員が少しでもよこしまな、自分本位の考え方をしようものなら、生徒は何も反応を返してくれなかったり、行きすぎた反応（やけに盛り上がるなど）を返したりする。